

1

名古屋

丸の内中学校

サトウ シンタロウ
名前 佐藤 慎太郎

分科会番号

2

分科会名

外国語教育

即興でやり取りできる生徒の育成

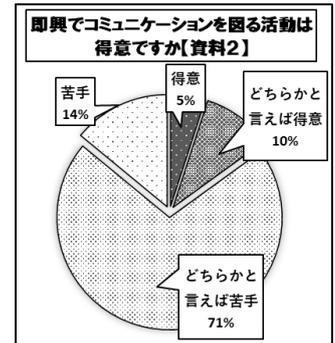
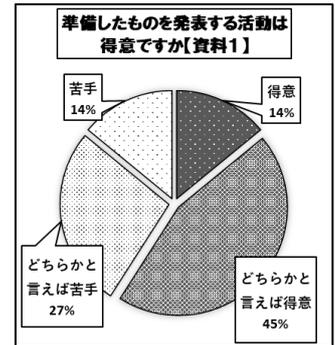
1 研究のねらい

(1) 生徒の実態

本校の2年生は、1年時よりペアでのコミュニケーション活動、テーマを設定したスピーチなど、授業内で学習した英語表現を活用する言語活動に多く取り組んできた。このような活動を通して、生徒たちは英語で発信をする活動に戸惑いを感じることなく取り組むことができるようになった。特に、あらかじめ原稿を準備して発表する言語活動では、自分の考えや思いが相手に伝わるよう、既習事項を適切に活用した取り組みをしている。それに対して、会話のやり取りのような即興性が求められる活動では、言葉が出てこなかったり、質問への応答のみとなってしまったりと、お互いの考えや思いを円滑に伝え合うことができているとは言い難い状況であることに気付いた。

4月に実施したアンケートの結果を見ても、多くの生徒が即興でコミュニケーションを図る活動には苦手意識をもっていることが分かった(資料1、2)。

この結果を受け、身近なテーマに関する画像を見て、「画像内の事実や自分が感じたことをきっかけに、考えや思いを伝え合うこと」を目的に、教師と即興で1分間やり取りをする実態調査を行った。即興でやり取りをするためには、「相手の発話に対するあいづち」、「自分の発話に対する付け足し」、「相手の発話を引き出す質問」が必要と考え、それらの観点から生徒の発話を分析してみると、表のような結果となった(資料3)。発話数は平均で6文程度だったのに対して、あいづち、付け足し、質問については平均で1文程度もしくはそれ以下であった。特に、あいづちや付け足しに関しては、10名以上の生徒が1文も言うことができず、円滑なやり取りの成立に向けて解決すべき課題だと考えた。



実態調査の結果(対象人数: 29名)【資料3】

	発話数	あいづち	付け足し	質問
平均値	6.08文	0.62文	0.91文	1.04文
最大値	11文	2文	3文	3文
最小値	3文 (4名)	0文 (13名)	0文 (11名)	0文 (5名)

実際の対話例(テーマ: 四季)【資料4】

生徒A : Hello. Do you like summer?
 教師 : Yes, I like summer.
 生徒A : (沈黙)
 教師 : What summer activity do you like?
 生徒A : I like swimming. (沈黙)
 教師 : Can you swim well?
 生徒A : Yes, I can.

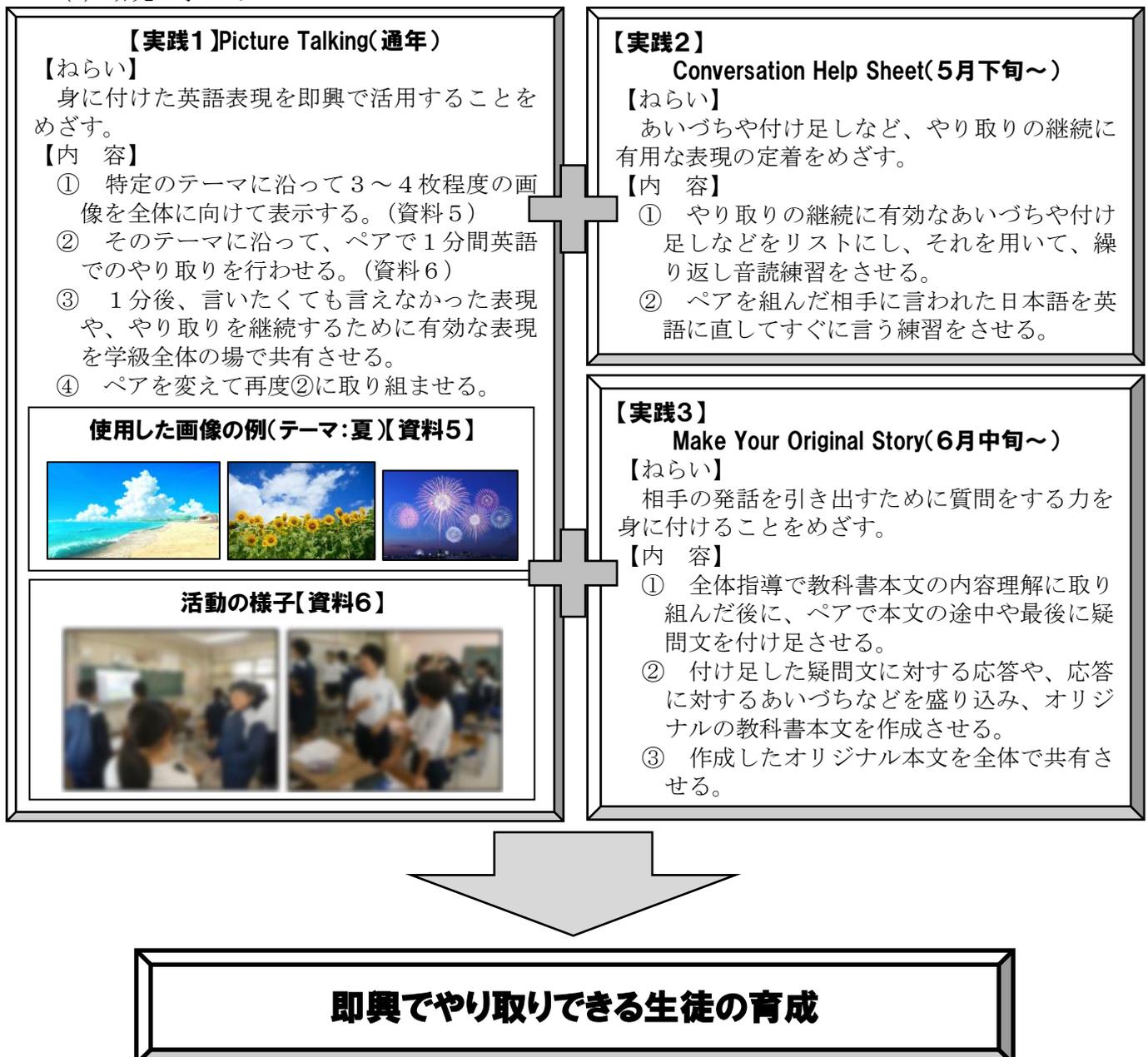
(2) めざす生徒像

お互いの考えや思いを即興でやり取りするためには、目的・場面・状況を踏まえ、相手の発話に応じて伝えたいことを考え、発信する力が必要になる。上記の生徒の実態から、私は、即興でやり取りすることができる生徒を育成したいと考えた。そこで、本研究ではまず、やり取りの継続に向けて有効なあいづちや付け足しなどの表現の定着を目指した活動を行う。そして、相手の発話を引き出す質問をする力を身に付けさせるために、教科書本文の途中や、最後に質問を付け足す活動を行う。さらに、これらの実践と並行して、実態調査で行った1対1での対話活動に繰り返し生徒同士で取り組ませることで、身に付けた英語表現を実際に活用する機会を設定するとともに、実践を通して生徒のやり取りがどのように変化していくかを常に観察する。これらの活動を通して、「即興でやり取りする力」を身に付けさせることができると考えた。

2 研究の方法

(1) 対象生徒 2年生 29名

(2) 研究の手立て



3 実践の内容

【実践1】 Picture Talking (通年)

(1) ねらい

身に付けた英語表現を即興で活用することをめざす。

(2) 実践の方法

- ① 特定のテーマに沿って3～4枚程度の画像を全体に向けて表示する。テーマは生徒の生活に関わりの深い内容とする。(資料7)
- ② そのテーマに沿って、ペアで1分間英語でのやり取りを行わせる。
- ③ 1分後、言いたくても言えなかった表現や、やり取りを継続するために有効な表現を学級全体で共有させる。
- ④ ペアを変えて再度同じ活動に取り組みさせる。

(3) 実践の様子

「画像内の事実や自分が感じたことをきっかけに、考えや思いを伝え合うこと」を目的として、活動に取り組みさせた。実践に取り組み始めた頃は、沈黙が続いてしまったり、“Oh!” や、“Yeah!” といった特に意味の無いリアクションの繰り返しで1分が経過してしまったりと、即興でのやり取りが成立してるとは言えなかった。そ

こで、1分間の活動に取り組みんだ後に、英語で言いたくても言えなかった英語表現を学級全体で共有し、生徒がより幅広い英語表現を使用できるよう中間指導を行った。(資料8)

また、やり取りを継続させるために必要な「あいづち」「付け足し」「質問」をできる限り意識するよう声を掛け、ペアを変えて再度同じテーマで活動に取り組みさせた。1回目よりも生徒が使用する英語表現の幅が広がり、1分を超えてもやり取りを続けるペアが見られるなど、

中間指導の内容が即興での円滑なやり取りに結び付いていることが実感できた。

(4) 考察

はじめはなかなか円滑なやり取りが継続できなかった生徒も、粘り強く練習を重ねるうちに少しずつやり取りの継続時間が伸びていった。活動に取り組む中で、「できた！続いた！」と達成感を感じている様子が見られた。

中間指導で、言いたくても言えなかった英語表現を学級全体で共有したことで、生徒がやり取りの中でより幅広い英語表現を活用できるようになった。また、活動のたびにペアを変えて取り組むことも、生徒がより多くの英語表現を習得するために有効であったと考える。

実践1に取り組む前と比較して、1分間やり取りが続く生徒は確実に増えたと言える。しかし、やり取りで活用されている英語表現に注目すると、同じあいづちの表現を何度も繰り返したり、同じ形式の質問ばかりを繰り返したりする生徒が多いことに気付いた。即興でのやり取りをより円滑に成立させるためには、さらに幅広い「あいづち」や「質問」を習得できるような実践が必要だと考え、実践2および実践3に取り組んだ。

使用した画像の例【資料7】

テーマ:「四季」



中間指導の内容【資料8】

教師: Do you have any questions?

生徒: 「花火を見て楽しかった」は何て言えばいいですか。

教師: OK. Does anyone have any idea?

生徒: I enjoyed fire...

教師: Nice idea! I enjoyed fireworks!

Please repeat!

生徒: I enjoyed fireworks!

【実践2】 Conversation Help Sheet (5月下旬～)

(1) ねらい

あいづちや付け足しなど、やり取りの継続に有用な表現の定着をめざす。

(2) 実践の方法

- ① やり取りの継続に有効なあいづちや付け足しなどをリストにし、それを用いて、繰り返し音読練習をさせる。(資料9)
- ② ペアを組んだ相手に言われた日本語を、英語にすぐに直して言う練習をさせる。

(3) 実践の様子

どの生徒も意欲的に活動に取り組んでいた。実践1同様、ペアで取り組む形式の活動にしたことで、生徒同士で競争意識が生まれ、1つでも多くの表現を習得しようとする姿勢が見られた。何人かの生徒は家庭で練習してくるようにもなり、お互いに刺激を与え合いながら取り組んでいた。

実践1も並行して行い、その中で使用した表現の使用回数を書き込むようにしたことで、自分がよく使用する表現や、逆にあまり使用していない表現に気付かせるようにした。「“Ah-huh.”ばかり使っている」「質問はなかなか回数が伸びない」といった発言も聞かれるようになり、生徒自身が自分のやり取りの傾向や表現の偏りを振り返り、あまり使用していない表現を意識して活動に取り組むようになるなど、生徒自ら自分の活動への取り組みを調整する姿が見られた。

(4) 考察

活動を繰り返すうちに、実践1でそれまで沈黙が続いてしまったり、特に意味の無いリアクションの繰り返いで1分が経過したりしていた生徒も、リストを見ながらではあるが、リスト内の表現をやり取りの中で活用する姿が見られた。また、それぞれの表現について、やり取りの中で担う役割ごとにリストを整理したことで、生徒が表現を使用する際に、「同意したいから・・・“I understand.”だ」というように、日本語の意味ではなく、その表現を使用する場面をイメージしながらやり取りに取り組むことができたと考える。これらのことから、実践2を通して生徒の即興でやり取りを続ける力は向上したと考える。

しかし、表現によって使用頻度に大きな差ができてしまっているという課題も見えた。特に、「質問」する表現についてはなかなか使用回数が伸びず、生徒のやり取りを聞いていても、ただ事実を述べ合っているペアも見られた。そこで、生徒の「相手の発話を引き出すために質問をする力」を向上させるために実践3に取り組んだ。

実際に使用したリストの一部【資料9】

Conversation Help Sheet			
▽相手の発言に同意する			
No.	English	Japanese	使用回数(正)
1	I agree.	賛成だよ。	
2	I understand.	わかるよ。	
3	That's right.	その通りだね。	
▽相手の発言に驚くリアクション			
13	Really?	ほんとに?	
14	Are you sure?	ほんとに?	
15	For real?	ほんとに?	
▽相手に何かしら質問する			
16	What is that? / What is ○○?	それって何? / ○○って何?	
17	How was that?	どうだった?(感想を尋ねる)	
18	Where is that?	それってどこ?	
19	Who did you go with?	誰と行ったの?	
20	When did you do that?	いつそれをしたの?	
21	Have you been there?	行ったことある?	

生徒の活動の様子【資料10】



【実践3】 Make Your Original Story (6月中旬～)

(1) ねらい

相手の発話を引き出すために質問をする力を身に付けることをめざす。

(2) 実践の方法

- ① 全体指導で教科書本文の内容理解に取り組んだ後に、ペアで本文の途中や最後に疑問文を付け足させる。
- ② 付け足した疑問文に対する応答や、応答に対するあいづちなどを盛り込み、オリジナルの教科書本文を作成させる。
- ③ 作成したオリジナル本文を学級全体で共有する。

(3) 実践の様子

教科書 Unit 内の対話形式で展開していく本文を中心に、この活動に取り組みさせた。初めて取り組む形式の活動であったため、戸惑う生徒の姿も見られたが、ペアでの活動にしたこともあり、相手と協力しながら取り組んでいた。オリジナル本文を作成する過程で、生徒たちから「Conversation Help Sheet の表現を使ってもいいですか」といった声が挙がり、これまでの実践を通して学習した表現を活用している様子が見られた。(資料 11)

また、これまで学習した表現を効果的に取り入れていたり、実践のねらいでもある「質問」を盛り込んで対話文を作成しているペアについては、学級全体の場で発表を促したりするなどして、全体のめざすべき姿を明確にした。さらに、タブレット端末を活用して、オンライン上でお互いの成果を見合うことで、「このストーリーおもしろい」「ここでこの表現も使えるんだね」といったように、より学びを深めていく姿が見られた。

生徒の記述内容(一部抜粋)【資料 11】

<p>Asami: What are we going to do today? Uncle: First, we're going to visit Merlion Park. Asami: Is the park far from here? Uncle: No, it's not. You'll see the Merlion soon. Asami: I can't wait. Uncle: After that, we're going to have lunch. What do you want to eat? Seafood or chicken rice? Asami: I want to eat seafood. Uncle: OK. I'll make a reservation. [58 words]</p>	<p>Asami: What is Merlion? Uncle: Are you sure? It's a symbol of Singapore. Uncle: Are you hungry? Asami: Yes, I am. Have you ever been to store?</p>
---	---

※ は Conversation Help Sheet 内の表現

(4) 考察

実践3に取り組んだ後に、実践1に立ち返り、1分間の対話に取り組ませたところ、多くの生徒がやり取りの中に「質問」する表現を取り入れており、実践3を通して生徒の「相手の発話を引き出すために質問をする力」は向上したと考える。ただ、質問するために活用されている英語表現に注目してみると、生徒が自信をもって使用できる1～2文程度の表現に留まっていた。即興でより自由にお互いの考えや思いを伝え合うためには、相手の発話や状況、相手と自分の関係性を考慮して適切な質問をする力が必要になる。今後実践を継続することで、さらに多様な表現の定着をめざす必要があると感じた。

4 研究のまとめ

(1) 成果と課題

三つの実践を経て、7月に再度、身近なテーマに関する画像を見て、「画像内の事実や自分が感じたことをきっかけに、考えや思いを伝え合うこと」を目的に、教師と即興で1分間やり取りをする実態調査を行った。そのやり取りの内容を、4月に実施した際と同様の観点から分析すると、表のような結果が得られた。(資料12)

多くの項目について伸びが見られ、この結果は今回の実践から得られた大きな成果であると考えられる。特に、あいづちと質問の項目の数値については、実践2および3が効果的に作用した結果であると言える。また、生徒同士のやり取りで活用されている具体的な英語表現に注目してみると、多くの生徒が実践2で練習したリスト内の表現

や、実践3で付け足した疑問文を使用しており、このことから、これまで取り組んできた実践が、生徒の「即興でやり取りする力」を向上させたと考えられる。(資料13)

また、これまでほとんど何も発言できなかった生徒も、何度も実践を重ねることで少しずつ発話数が増えた。それぞれの項目について最小値となった生徒数が大幅に減ったことから、その成果が見て取れる。

一方で、三つの実践を経ても、「あいづち」を表す英文が1文も言えなかった生徒が5名いることは課題である。そういった生徒たちの対話を分析すると、相手の発話の意味が理解できなかったり、言葉が出てこなかったりすることなどが原因で、沈黙が続いてしまっている場合が多いことに気付いた。こういった生徒に対して、“Pardon me?”といった、やり取りの中で困った際に使いやすい表現を繰り返し練習させるなどの手立てが必要だと考える。

(2) 今後について

実態調査の分析結果から分かるように、今回の実践を通して生徒の「即興でやり取りする力」は向上した。しかし一方で、既習表現を定着させ、それを場面に応じて即座に活用することの難しさを改めて実感した。

また、今回の実践では、「画像内の事実や自分が感じたことをきっかけに、考えや思いを伝え合うこと」をやり取りの目的として設定したが、より日常生活に即した、英語を使用する必然性を感じられるような目的や場面、状況を設定することも、生徒がより幅広い英語表現を活用して即興でやり取りできるようになるためには必要な工夫だと感じた。今後は、より一層「目的・場面・状況」を意識した活動を授業の中で繰り返し行い、生徒が即興でやり取りを続けられるような力を身に付けさせたい。

実態調査の結果の比較【資料12】								
	発話数		あいづち		付け足し		質問	
	4月	7月	4月	7月	4月	7月	4月	7月
平均値	6.08文	7.15文 (+1.07文)	0.62文	1.38文 (+0.76文)	0.91文	1.42文 (+0.51文)	1.04文	2.19文 (+1.15文)
最大値	11文	11文	2文	3文	3文	3文	3文	4文
最小値	3文 (4名)	4文 (1名)	0文 (13名)	0文 (5名)	0文 (11名)	0文 (1名)	0文 (5名)	0文 (1名)

実際の対話例(テーマ:日本文化)【資料13】

生徒A: Hello. What Japanese food do you like?

教師: I like sushi and tempura.

生徒A: Oh! Me, too!

What kind of sushi do you like?

教師: I like salmon.

生徒A: Oh! Me, too!

教師: Which sushi restaurant do you like?

生徒A: I like ○○ sushi. How about you?

教師: I like △△ sushi.